

江別市における児童の体力向上に関する研究（第20報）

—A小学校における「朝の運動遊び」での ジュニアリーダー育成の手順と課題③—

Studies on Improvement of Physical Fitness at Elementary Students in Ebetsu City 20
— Step and Challenge of Jr. Leader's Rearing on Practice of Morning Exercise
at A Elementary School 3 —

大 宮 真 一¹⁾ 石 井 由 依²⁾
Shin-ichi OMIYA Yui ISHII

竹 田 唯 史¹⁾ 増 山 尚 美¹⁾ 晴 山 紫 恵 子²⁾
Tadashi TAKEDA Naomi MASHIYAMA Shieko HAREYAMA

I. はじめに

本研究は、平成21年度に開始された江別市教育委員会と本学北方圏生涯スポーツ研究センターとの連携による児童の体力向上を目的に江別市立A小学校を対象として継続的に実践してきた、平成30年度で10年目となった。平成25年度から低学年児童の運動遊びをサポートする上級学年児童の社会性を育むことや、低学年児童が上級学年児童の運動する姿や指導姿勢に対して憧れることで生まれる自己効力感の高まりによる社会性の向上の目的を付加して、小学校4年生から6年生で構成されるジュニアリーダー（以下、Jr. L）と1年生との異学年交流での「朝の運動遊び」を継続することとなった。これまでの研究事業の内容については本学研究紀要等¹⁻¹⁸⁾に報告し、年度ごとに次年度の課題を設定してい

る。平成27年度の実践^{12,13)}では、今後児童たちの集団の中で運動遊びが伝承されていくことを期待し、教員や大学生指導者の指示的指導体制を弱めながら、Jr.Lが1年生に運動遊びの指導を行った。Jr. Lは実践の回数が進むにつれて、全員が指導経験をする中、複数回指導したいと申し出る積極的な様子がみられ、リーダーとしての意識が芽生えてきたことを報告した。このことは、上級学年児童の運動遊びの指導によって低学年児童へ運動遊びの楽しさが伝承され子ども集団内の活動によって体力や運動能力が高まっていく環境となってきたことを意味するものであると考えられる。その中で平成28年度への課題について、1) Jr. Lを育てるためのマニュアルの作成、2) いじめや怪我などのリスクから子どもの集団を見守る人的サービスの提供の2つを挙げている。これらのことから、今日

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北方圏生涯スポーツ研究センター

の少子化やいじめ等の社会問題を考える時、子ども主体に考える「異年齢児童の集団で成立する運動遊びの環境づくり」は途上段階であると報告している。このことから28年度は、Jr. Lが主体的となって運動遊び内容を決定し、実践回数が少なかったことから多くの指導場面を増やして子ども集団のコミュニティで遊びが展開される段階へと移行し、大学生指導者がその様子を見守りつつ一緒に運動遊びを実践しながらサポートしていくことが課題であるとしている。この課題を受けて平成29年度の実践を行った。その結果、Jr. Lがオリジナルで遊びの説明をしたり、その手本を示したり、なおかつ20分以内でそれらを達成することが困難であったため、①Jr. Lが、大学生または運動遊びに関する指導者が楽しく運動遊びを提供する指導場面を1年生の立場となって体験する、②大学生または運動遊びに関する指導者が20分間の実践の中で、説明の内容や話し方、手本の示し方、声の大きさ、1年生に感想を聞いて遊びの評価をすることなど、実践の流れをJr. Lたちに理解してもらい、③Jr. Lが最初に遊びを考案してきた内容を説明し実践後に、他のリーダーから意見を集め、リーダーと1年生がともに楽しく遊ぶことができるように意見をまとめて、次回の実践内容を提示することを明確にできるようにする、ことの3つが課題として挙げられている。そこで、本研究は平成29年度の課題をもとにしてJr. Lの育成について、明確な指導マニュアルを示し、それをもとに次世代のJr. Lへ継承できるような体制づくりを目指し、Jr. Lからの実践後のアンケート調査および実践事例から報告することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

江別市内のA小学校を対象とし、4年生と6年生の23名がJr. Lを希望して参加した。このJr. Lを平成28年度4年生の時から3年連続Jr. Lを担当した今年度6年生が7名含まれている。なお、5年生は参加しなかった。この原因については、昨年度のJr. Lのアンケートから、当時の4年生（現在5年生）が来年（30年度）もジュニアリーダーとして参加したいですか？という問いに対して、「したくない」という回答が9割を超えていた¹⁸⁾結果が反映されたものと考えられる。

今年度のJr. Lが指導する対象となった1年生は30名であった。

2. Jr. L育成の実践形態

対象の児童に対し、平成30年4月24日～11月30日までの期間の火曜日と金曜日において計30回であったが、9月7日が前日に発生した胆振東部地震の影響により中止となったことから29回となった。全ての実践は、午前8時00分～20分までの20分間で行った。実践内容の詳細は、竹田¹⁹⁾が報告している。

平成30年度における29回の実践において、3回を1クールとして、計8クールが展開された。

第1～2クールにおいては、大学教員がメイン指導者としてJr. Lが目指す指導方法を模擬的に実践した。1回目は考案した運動遊びを紹介しJr. Lが実践して全力で遊ぶ日、2回目が1年生へ指導するための運動遊びの遊び方についてJr. Lが意見を出し合って検討するJr. L会議の日、そして3回目がJr. L

が1年生を指導する日とした。第3クール以降は、1回目からメイン指導を行うJr. Lが運動遊びを考案・実践し、実践後に1年生と実施可能な内容であるか、運動量や説明にかかる時間などを反省して内容を改善するための会議をし、2回目に再度実践および打ち合わせ、そして3回目に1年生と運動するような流れとした。なお、夏休み前の第5クールは1年生も参加した日が1日増えて計4日間、夏休み明けの8月21日はJr. Lのみで今後の予定を確認、学芸会明けで終盤の11月27日・30日の2回はJr. Lと1年生全員で遊びが展開された。

3. Jr. Lにおける1年生への指導体制づくり

1年生に対してメイン指導を行いたいJr. Lを自主的に行えるようにし、その1回のメインリーダー人数は制限しなかった。初回にJr. Lの任命証⁹⁾を授与する任命式を実施し、今年度における実践のねらいを説明した。第1および2クールまでは、本研究に関わる大学教員が考案した運動プログラムをJr. Lに実践してもらい、1年生に運動プログラムを指導してもらうための指導形態を模擬的に示し、Jr. L会議で次の運動プログラムを改善するために意見を出してもらったことをまとめること、1年生へ運動の仕方についての手本を見せた後に補足をしながら説明する方法、運動する時間を気にかけながら運動量を確保することを伝えた。Jr. L会議内において1年生が実践可能な内容となるようにJr. Lに意見を出してもらった。

Jr. L会議の日の最後および第3クール以後は3回目の1年生への指導終了後に、次回に1年生を指導するペアには輝きカードに指

導の要領やメモが自由に書き込めるカードを配布した。指導日には持参して、それをもとに1年生と他のJr. Lとの運動遊びをリードする役割を果たした。また、Jr. Lの主體的な運動遊びの展開や説明の内容についての意見はできるだけ尊重するよう心がけた。

4. 実践後におけるJr. Lへのアンケート

12月の最終回にJr. Lへ今年度の実践に対するアンケートを配布し、その質問項目から調査を行った。質問内容と回答について表1に示した。アンケート内容は、Jr. Lの実践評価、好き・苦手なスポーツ・運動・体育の内容、日常の身体活動量、6年生には中学校へ進学することに対する朝運動での体験活動の活用についてであった。

Ⅲ. 結果および考察

今年度は、Jr. Lに対して1年生に対する指導マニュアルを明確に示し、それをもとに次世代のJr. Lへ指導マニュアルを継承していくことを目的として実践した。Jr. Lはメイン指導を行った学年は夏休み前までは6年生が中心となり、夏休み後は4年生へと変わっていった。夏休み前のJr. Lの様子の特徴として、積極的に運動プログラムを考案し、それを1年生とともに実践したいという気持ちが強かった。一方で、20分間と短時間の中で、運動の遊び方の説明が長くなったり、手本を示すことがなく黒板に動き方の模式図を示すのみだったこと、運動量が少なかったり、と昨年までの課題が解決できていない状況が度々みられた。そのため、大学教員および学生が直接的に介入し、Jr. Lに運動実践を振

表1 アンケート集計結果

1. 1年生に運動の遊び方を教えることなど、どのくらいかわることができましたか？

選択肢	ジュニアリーダー 全体	4年生	4年 (男)	4年 (女)	6年生	6年 (男)	6年 (女)
①たくさんかわれた	16	10	4	6	6	4	2
②少しかかわれた	6	2	1	1	4	3	1
③あまりかわれなかった	1	0	0	0	1	0	1

り返らせ、4月当初に挙げた課題が達成できているかどうか評価させた。その中で、リーダーとしての役割や自覚、そして20分間の中で1年生へ短時間で説明を終え、手本を示すことで動きを目で訴えて遊び方を伝えた方がより伝達できる、ということが理解できた様子であった。そして、11月下旬の2回は、4

年生全員がメインリーダーをやりたいということで自発的な動きがみられ、4年生で事前に打ち合わせが行われ、役割分担がきちんとなされ、説明担当、遊び道具準備担当、1年生をまとめる担当など、大学側が要求する以上の活動の様子がみられたことは予想外であった(図1)。



運動内容を黒板に板書



運動のやり方について手本を見せて説明



運動の様子



図1 11/27のJr. Lと1年生との取り組みの様子

1年生とかかわって自信がついた事を書いてください

<4年生>

- ・一年生にやさしく説明できるようになった。
- ・一年生に声をかけられたりできたからよかった。
- ・私が話すのが苦手だったけど、一年生とかかわって話すのに自信がついた。
- ・下の学年にいろいろな遊びを教えられるんだって自信がついて。
- ・発表
- ・たくさん運動することに自信ができました。
- ・自分から話しかけられたこと
- ・一年生と仲良くなれた。よく話をする。自分から話しかけられるようになった。
- ・今度また一年生と遊ぶときに、これをしようと言える。自信がついた。
- ・他の人に話かけることができるようになった。
- ・説明することに自信がついた。
- ・自分でもちゃんと伝えられるとわかってうれしかった。

<6年生>

- ・低学年と仲良くなれた自信
- ・下の学年と仲良くなること。自分から話しかける。
- ・下の学年と仲良くなれた。
- ・リーダーとなり、みんなを引っ張る力。
- ・みんなの前に出ること。
- ・一年生とあまりかかわってなかったけれど、ジュニアリーダーに参加してから一年生と話せるようになった。
- ・下級生とコミュニケーションをとること
- ・一年生に考えてきたゲームを前に出て教えるのが最初は恥ずかしかったけど、段々となれてきて自信がついた。
- ・説明をわかりやすくすること。
- ・色々な人と話すことができた。

1. 実践後のアンケート調査から

- 1) 「1年生に運動の遊び方を教えることなど、どのくらいかわることができましたか？」から

この質問内容から Jr. L のほとんどが 1 年生と関わることができたことが明らかとなった。また、その中で自信をつけたことについて、「説明ができるようになった、人前で話す」ことについての記述がのべ 8 件、「1 年生へ話しかける、仲良くなれる」ことについての記述がのべ 12 件あった。このことは、リーダーとしての自覚が高まったことを示すものと考えられ、10 回ほどの 1 年生との関わりであったが、本研究で参加した Jr. L にとって異学年交流の

中でコミュニケーションを取ったことが恥ずかしさや不安を取り除くだけの十分な機会および精神的にも成長できた結果であったと考えられる。

2) 実践後の自己評価から

「運動遊びのプログラム内容作成について、意見を出しましたか？」では、半分の Jr. L がよくできたと回答していた。したがって、運動遊びの内容の決定については一部のリーダーが決定権を持って進めていたことが推測される。運動遊びは Jr. L が 1 年生とともにできる内容ということもあるため、複雑な課題が背景にあることから、Jr. L のみがやりたいだけという運動にはならない。このこと

2. ジュニアリーダーとして、よく出来たところに◎、まあまあ出来たところに○、少し出来たところに△を書いてください。

①運動遊びのプログラム内容作成について、意見を出しましたか？

選択肢	ジュニアリーダー 全体	4年生	4年 (男)	4年 (女)	6年生	6年 (男)	6年 (女)
◎	12	6	4	2	6	3	3
○	7	2	1	1	5	4	1
△	4	4	0	4	0	0	0

運動する時間（20分）について、考えて指導はできましたか？

選択肢	ジュニアリーダー 全体	4年生	4年 (男)	4年 (女)	6年生	6年 (男)	6年 (女)
◎	13	9	4	5	4	2	2
○	10	3	1	2	7	5	2
△	0	0	0	0	0	0	0

運動の説明について、リーダーや1年生にわかりやすくてできましたか？

選択肢	ジュニアリーダー 全体	4年生	4年 (男)	4年 (女)	6年生	6年 (男)	6年 (女)
◎	14	10	4	6	4	2	2
○	9	2	1	1	7	5	2
△	0	0	0	0	0	0	0

運動プログラムを考えてきたリーダーへの協力はできましたか？

選択肢	ジュニアリーダー 全体	4年生	4年 (男)	4年 (女)	6年生	6年 (男)	6年 (女)
◎	16	9	4	5	7	4	3
○	7	3	1	2	4	3	1
△	0	0	0	0	0	0	0

運動プログラムの作成やジュニアリーダー会議で自分の意見を言えましたか？

選択肢	ジュニアリーダー 全体	4年生	4年 (男)	4年 (女)	6年生	6年 (男)	6年 (女)
◎	12	7	4	3	5	3	2
○	7	3	1	2	4	3	1
△	4	2	0	2	2	1	1

から、大学教員や学生指導者が、Jr. Lが1年生であったころを振り返らせ、どのような運動遊びだったらルールが理解でき、運動のイメージがわきやすいのかを介入時に質問を投げかけたこともあった。

「運動する時間（20分）について、考えて指導はできましたか？」について、全員がよ

くできたまたはまあまあできたに回答していた。実践の回数が増えるにつれ、時計を気にしながら運動する時間について考えることができるようになったと考えられる。

「運動の説明について、リーダーや1年生にわかりやすくてできましたか？」について、全員がよくできたまたはまあまあできたに回

リーダー自身がたくさん遊べましたか？

選択肢	ジュニアリーダー 全体	4年生	4年 (男)	4年 (女)	6年生	6年 (男)	6年 (女)
◎	18	11	4	7	7	4	3
○	7	3	1	2	4	3	1
△	0	0	0	0	0	0	0

3. ①好きなスポーツ・運動・体育は何ですか？
<4年生>

	全体	4年生	6年生
野球	5	2	3
サッカー	4	3	1
ドッジボール	5	4	1
ソフトボール	1	1	0
バレーボール	1	1	0
ソフトバレーボール	1	1	0
バトミントン	3	3	0
ハンドバースポール	1	1	0
テニス	1	1	0
水泳	1	0	1
スキー	1	0	1
球技	1	0	1
ティボール	1	0	1
タグラグビー	1	0	1
跳び箱	1	0	1
鬼ごっこ	1	1	0
陸上・走ること	2	2	0
全部	1	1	0
なし	1	0	1

②苦手なスポーツ・運動・体育は何ですか？

	全体	4年生	6年生
バレーボール	1	1	0
バスケットボール	1	1	0
ソフトボール投げ	1	1	0
マット運動	1	1	0
リレー	1	1	0
跳び箱	2	1	1
鉄棒	1	1	0
サッカー	1	1	0
ドッジボール	1	1	0
水泳	3	1	2
走ること	3	1	2
ボール遊び, ボール投げ	2	1	1
球技	1	0	1
打つ	1	0	1
シャトルラン	1	0	1
なし	6	2	4

答していた。運動プログラムの説明、1年生との関わりの中で、メインリーダーの説明の意図を補足しながら児童同士の会話の中で伝達することができたと考えられる。

「運動プログラムを考えてきたリーダーへの協力はできましたか？」についても全員がよくできたまたはまあまあできたに回答していた。リーダーとしての自覚の芽生えから、全員が協力して朝運動を成り立たせていたことを示すものであったと考えられる。

「運動プログラムの作成やジュニアリーダー会議で自分の意見を言えましたか？」について、多くのJr. Lは発言したり、意見・質問をしていたことが伺えた。中には発言ができないリーダーもいた。大学教員や学生指導者が介入しながら、Jr. Lの思っていることを聞き出していたこともあったので、なかなか発言ができないリーダーの中でよい意見があれば、それを代弁しながらリーダー全体へ伝達することも必要であると考えられる。

4. 体育の授業のほかに1時間以上運動する日が1週間に何回ありますか？

<4年生>

	<少年団>		<運動教室>		<友達や家族と遊ぶ日>	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
週0回	4	7	3	3	1	0
週1回	0	0	0	3	0	2
週2回	1	0	1	1	0	0
週3回	0	0	1	0	0	3
週4回	0	0	0	0	1	0
週5回	0	0	0	0	0	0
週6回	0	0	0	0	1	0
週7回	0	0	0	0	2	2

<6年生>

	<少年団>		<運動教室>		<友達や家族と遊ぶ日>	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
週0回	1	4	5	2	2	3
週1回	2	0	2	1	0	0
週2回	1	0	0	1	2	0
週3回	1	0	0	0	1	0
週4回	1	0	0	0	0	0
週5回	0	0	0	0	0	0
週6回	0	0	0	0	0	0
週7回	0	0	0	0	1	1

「リーダー自身がたくさん遊べましたか?」, について全員がよくできたまたはまあまあできたに回答していた。リーダー自身が朝運動を企画する立場と楽しく運動したことを両立できたことを示す結果であったと考えられる。

3)「好きなスポーツ・運動・体育は何ですか? , 苦手なスポーツ・運動・体育は何ですか?」から

この質問については, 小学校中学年・高学年の児童がどのような運動に興味・関心があり, 得意と思っているものを挙げてもらうことによって, これまでに身体活動歴として実践してきた内容で今後の運動を継続するための方向性を示すものと理解できる。一方で苦手な

運動を挙げてもらうことで, 中学年・高学年までに習得しておかなければならない運動能力や嫌いにならないような手立てで運動指導をしておくことが必要となる種目を示している。

特に, 好きなスポーツ・運動・体育については球技に関して11種類が挙げられている。もともと Jr. L は運動志向の強い児童の集まりと推測され「4. 体育の授業のほかに1時間以上運動する日が1週間に何日ありますか?」の質問とリンクしていると考えられる。一方, 運動志向の強いと考えられる児童の中にも苦手な運動が挙げられ, 球技や器械運動に関する内容が挙げられている。したがって, これらの運動ができるようになるためには, これまで A 小学校で取り組んできたような運

5. (6年生への質問) ジュニアリーダーをこれまでに何年間行いましたか？

<4年生>

選択肢	6年生全体	男子	女子
①3年間	7	7	0
②2年間	1	0	1
③1年間	3	0	3

これから中学校へ進学することになりますが、ジュニアリーダーの経験はどんなことに活かせると思いますか？

- ・会議で自分の意見を言うことを生かせる
- ・上手に説明すること
- ・先輩、後輩への態度
- ・どんな学年でもすぐにかかわれる
- ・中学校のスピーチのとき、みんなの前に出て発表すること
- ・いろいろな学年と交流をする事
- ・一年生にはもっと簡単に説明した方が良い
- ・色々な人のかかわりや発表する気持ち、運動能力を様々な時に活かせると思います。
- ・人に何かを説明すること
- ・朝に運動をすること
- ・前に出る時、大きな声で言える。
- ・学習などで人に説明する力が活かせると思う。

6. 中学校では、どんな部活に入りたいですか？

選択肢	人数
野球	3
剣道	1
サッカー	1
バトミントン	1
テニス	2
運動する部活	1
パソコン、美術部	2

動遊びを、球技や器械運動のアナログとなる動作の獲得とその体験が低学年までに必要不可欠であると考えられる。

4) 「ジュニアリーダーをこれまでに何年間行いましたか？(6年生対象)、これから中学校へ進学することになりますが、ジュニアリーダーの経験はどんなことに活かせると思いますか？」から

今年度参加した6年生は初めての参加者は3名、複数年のリーダーを体験している児童

が8名であった。中学校で活かすことの内容についても、生徒同士の関わり、部活動やイベントで楽しい企画を考えるための基盤づくりやコミュニケーションを取ることなど進学先での自らの行動意識などにつなげていきたいということが明らかとなった。

2. Jr. Lの育成課題

今年度のJr. Lは4年生が11月下旬の1年生との実践の中で役割分担をしながら運営す

る姿がみられた。次年度、Jr. Lの取り組みを実践することができれば、進級した5年生を中心として4年生へ指導マニュアルを継承していくことが課題となる。そして、さらなる課題を付加するとすれば、小学校中学年・高学年で苦手とする運動ができるようにするための手立てをJr. Lとともに考案していくことにある。

文 献

- 1) 大宮真一, 竹田唯史, 増山尚美, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における子どもの体力向上に関する研究—A小学校の体力・運動能力の現状と身体活動力の調査方法について, 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報, 創刊号, 57-67, 2010.
- 2) 竹田唯史, 大宮真一, 増山尚美, 晴山紫恵子: 江別市における児童の体力向上に関する研究—東広島市内小学校における児童の体力向上の取り組みの視察報告—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 創刊号, 107-119, 2010.
- 3) 竹田唯史, 大宮真一, 山本公輔, 増山尚美, 晴山紫恵子: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第3報)—A小学校における朝運動プログラムの実践—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第2号, 19-34, 2011.
- 4) 大宮真一, 竹田唯史, 増山尚美, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第4報)—千歳県八千代市内小学校における児童の体育授業の取り組みの視察報告—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第2号, 101-108, 2011.
- 5) 大宮真一, 晴山紫恵子, 山本公輔, 竹田唯史, 増山尚美: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第5報)—A小学校における「朝の運動遊び」実践プログラムの紹介—, 北翔大学短期大学部研究紀要, 第50号, 43-58, 2012.
- 6) 竹田唯史, 大宮真一, 山本公輔, 増山尚美, 晴山紫恵子: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第6報)—A小学校における朝運動プログラムの実践—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第3号, 13-26, 2012.
- 7) 大宮真一, 晴山紫恵子, 山本公輔, 増山尚美, 竹田唯史: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第7報)—A小学校における「朝の運動遊び」実践プログラムの紹介—, 北翔大学短期大学部研究紀要, 第51号, 1-16, 2013.
- 8) 竹田唯史, 大宮真一, 山本公輔, 増山尚美, 晴山紫恵子: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第8報)—A小学校における朝運動プログラムの実践—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀, 第4号, 1-15, 2013.
- 9) 大宮真一, 晴山紫恵子, 石井由依, 増山尚美, 竹田唯史, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第9報)—A小学校における「朝の運動遊び」の新たな実践プログラム—, 北翔大学短期大学部研究紀要, 第52号, 1-16, 2014.
- 10) 竹田唯史, 増山尚美, 大宮真一, 晴山紫恵子, 山本公輔, 石井由依: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第10報)—A小学校における朝運動プログラムの実践—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第5号,

- 1-14, 2014.
- 11) 大宮真一, 晴山紫恵子, 石井由依, 増山尚美, 竹田唯史, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第11報) —A小学校における「朝の運動遊び」の異学年交流実践プログラム—, 北翔大学短期大学部研究紀要, 第53号, 21-36, 2015.
- 12) 竹田唯史, 石井由依, 増山尚美, 大宮真一, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第12報) —A小学校における朝運動プログラムの実践—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第6号, 13-27, 2015.
- 13) 大宮真一, 晴山紫恵子, 石井由依, 増山尚美, 竹田唯史, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第13報) —A小学校における「朝の運動遊び」でのジュニアリーダー育成の試み—, 北翔大学短期大学部研究紀要, 第54号, 13-27, 2016.
- 14) 竹田唯史, 石井由依, 大宮真一, 増山尚美, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第14報) —A小学校における朝運動プログラムの実践と効果検証—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第7号, 1-16, 2016.
- 15) 竹田唯史, 石井由依, 大宮真一, 近藤雄一郎, 増山尚美, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第15報) —A小学校における朝運動プログラムの実践と効果検証—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第8号, 141-155, 2017.
- 16) 大宮真一, 石井由依, 竹田唯史, 近藤雄一郎, 増山尚美, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第16報) —A小学校における「朝の運動遊び」でのジュニアリーダー育成の手順と課題①—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第8号, 157-165, 2017.
- 17) 竹田唯史, 石井由依, 大宮真一, 近藤雄一郎, 増山尚美, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第17報) —A小学校における朝運動プログラムの実践と効果検証—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第9号, 67-78, 2018.
- 18) 大宮真一, 石井由依, 竹田唯史, 近藤雄一郎, 増山尚美, 晴山紫恵子, 山本公輔: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第18報) —A小学校における「朝の運動遊び」でのジュニアリーダー育成の手順と課題②—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第9号, 79-89, 2018.
- 19) 竹田唯史, 石井由依, 大宮真一, 近藤雄一郎, 増山尚美, 晴山紫恵子: 江別市における児童の体力向上に関する研究 (第19報) —A小学校における朝運動プログラムの実践と効果検証—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第10号, 印刷中, 2019.

付 記

本研究は、平成30年度江別市教育委員会委託事業補助金の交付を受けて行ったものである。

謝 辞

江別市立文京台小学校校長の三科圭介先生をはじめ、関係各位と対象児童の保護者の皆様のご理解に深謝申し上げます。

